

コロナ禍の就職活動で感じたこと

コロナ禍、当たり前にあったことが突然無くなる時代になったことを実感しています。就職活動はリアルな企業説明会がなくなり、面接にもオンラインが導入され例年とは全く違った形になりました。また新卒の求人総数は航空業界などを中心に採用が控えられ、昨年より約12万人減少して68万人になりました。急速かつ強制的にデジタル化が進んだことで準備が整わず、学生、企業とも情報が限られる中、結果的に地元企業への就職が増えるなど守りの選択になったと感じています。幸い本学の就職率は11月に入ってほぼ前年並みまで回復し専門性を持った理系人材の求人は減っていない印象です。

変化を感じた点は新型コロナによってテレワークや時間差勤務など柔軟な働き方が求められるようになり、仕事の内容や評価基準を細かく定義して採用するジョブ型雇用が増えてきたことです。採用に当たって「この学生はどんなスキルをどのレベルで身に付けているのか」やそのプロセスが問われるようになっていきます。またデジタル化やAIの進化とともにホワイトカラーの仕事も変容する時代を迎えています。今後、学生が「どのようなスキルをどのようにして身に付けたのか」を明確に答えられるようコミュニケーション能力をつけて世に送り出すことが大学の最重要課題になってきました。

このような中、昨今の就職活動はその年の景気や社会情勢に左右されています。今年の卒業生が働き盛りを迎える2040年には労働者1.5人で1人の高齢者を支える時代がやってきます。コロナ禍でこれまで隠れていた未来社会の現実が身近に見えてきました。今大学で出来ることは、教養の幅を広げて自ら学ぶ力と思考力を高め、現状をきちんと認識して逆境にも対応できる学生を育てることしかありません。今回の災禍は、社会全体が日本の「未来の姿」をきちんと受け止め、未来を支える若者の就職の在り方を見直すよう警鐘を鳴らしているのではないのでしょうか。

身近に感じるSDGs(持続可能な開発目標)

パンデミック下でも、皇帝グリアに続いて山茶花が咲き冬の到来を告げています。アフリカや中東では異常発生したサバクトビバッタが国境を越えて移動し農作物を食い荒らしています。国連食糧農業機関(FAO)によると何千万人という人が食糧危機に直面しているそうです。なんでも増えすぎると環境が変化するだけでなく、種々のひずみが出るものです。

そのような観点で人類を見ると1960年に30億人と言われた世界人口が2000年には60億人を突破し今年には77億人を超えたと言われています。国連では2050年に97億人になるとも予測しています。人類はバッタ以上に食料を必要としエネルギー資源も使うので世界的気候変動などが頻発するのは当然の帰結です。食料やエネルギーは国境を越えて裕福な国に移動しています。世界の人々の飢えを救うための食糧は年間320万トンと言われていますが、日本だけでも食品ロスは年間約612万トン/年(2017)もあるのです。このような事実を目の当たりにして、2015年に国連サミットで持続可能なより良い世界を目指して2030年までに取り組む世界目標として定められたのがSDGsです。貧困や飢餓をなくす視点や健康、働き甲斐、気候変動に至るまで世界が抱える17項目の課題解決目標が包括的に掲げられています。

本学では、学生がSDGsに掲げられた持続可能性について意識をもった上で環境問題やリスクマネジメントを学び、設計段階から製造、廃棄までのサイクルを意識して環境負荷が小さく人に優しい商品づくりや事業に取り組める人材に成長することを目指しています。そこで「本学が目指す『SDGs』への取り組み」を各学科が掲げるとともに教養科目の中でSDGsを取り上げたり土木工学系の講義の中で環境ボランティアを実践したりしています。

学生たちがいつもと変わらぬ自然風景の中にあっても環境が確実に変化していることに気づきSDGsを意識できる若者に育って欲しいと願っています。